

---

# 増殖探偵・丸斗恵

腹筋崩壊参謀

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

増殖探偵・丸斗恵

### 【Nコード】

N0202Z

### 【作者名】

腹筋崩壊参謀

### 【あらすじ】

分身能力を持つボーイッシュな女性局長と、無敵の力を有するガールッシュな男性助手。依頼も推理もないけれど、悪党妖怪未来人。どんな強敵も一網打尽。過去も未来もぶっ飛ばすこの二人を中心に、物語を進めていこうと思います。この作品は別サイト及びpixivにて投稿したものに加筆修正を加えたものとなっております。

## 01・よつこそ、丸斗探偵局へ

日本のとある街。一人の貴婦人が、途方に暮れていた。

街は今、お祭り真つ盛り。人通りも激しい中、弱弱しい彼女の声は、より賑やかな街の喧噪のなかに消えていく。このままでは、孫どころか自分すら行方が分からなくなりそうだ。そんな事すら思い始めた時、彼女の目にある看板が止まった。

「丸斗…探偵局？」

「はあ…退屈…」

少し古びたビルの一室で、一人の女性が暇を持て余していた。

彼女の名前は「丸斗恵<sup>まると・めぐみ</sup>」。丸斗探偵局の代表、局長の座に就く女性である。

「それだけ平和な証拠ですよ、局長」

独り言のような彼女の言葉に応える燕尾服の男は、助手の「デューク・マルト」でゅーく・まると。「恵を支える、頼もしい人材である。」

ここ「丸斗探偵局」は、局長と助手、二人だけで切り盛りする小規模な探偵事務所である。それゆえ、大事件など持ちこまれることは滅多にない。というか想定していない。…という事で、一日の大半は、事務所内で暇を持て余すというのが日課となっている。

「そんなこと言ってもねえ…仕事なきや生活できないわよ…」

客との相談用に設けてある机にだらしなく持たれかける恵。乱れたセミシヨートの紫髪もさることながら、今の局長のスタイルは警戒心がなさすぎる。露出を嫌うはずなのだが、今の彼女は自分の胸の谷間が服から覗いているを心配する事すら頭になかったようだ。とにかくくだらけていたい、という局長を見て、助手のデュークは呆れ顔で眺めている。腰に届くまで伸びた髪をかき上げるか、黒ぶちの眼鏡を少しだけ持ち上げるか。どちらかをしているという事は、今の状態に少しだけ不満はあるものの、悪くないという現す癖であることを彼は承知していた。

この光景、この探偵局では日常光景である。怠け癖のある恵がだらけ、デュークが突っ込みを入れるという日々を過ごしているのだ。それでもデュークが見限らないのは、彼女と共に働く今の状況を誇りに思っているからである。そしてもう一つ、彼女の「能力」を、自らの「力」で支え続けるために。

と、突然呼び鈴の音がした。慌てて服や髪を整える恵。てんやわんやの彼女は、ネクタイを整えるだけでどんな事態にも対処できる。黒のスーツを着こなすデュークの心構えとは対照的だ。助手が応対し、音の主を探偵局へと誘導する。依頼人が来たのだ。

「ようこそ、丸斗探偵局へ」

今日の依頼人はどこかの貴婦人。どうやら一緒に来た孫が街で行方不明になったらしい。

「そういえば、今日はちょっとした祭りがあるようですね」

「見失った場所は覚えていますか？」

「それが…分からないのです…」

申し訳なさそうな顔の貴婦人。交差点近くで気付いた時、既に孫はいなかったという。

「本当にすいません、何も分からないのにいきなりお邪魔してしまつて…」

「いえ、十分情報は得ました」

「…え？だ、大丈夫なのですか…？」

自信満々の局長。心配そうな貴婦人へ、優しく語り掛ける助手。

「僕たちにお任せ下さい。あなたの依頼、100%解決させます」

探偵局を出た恵は、おもむろに近くの物陰に隠れる。周りに誰もいないことを確認した彼女。恵を見ているのは、頭上に光る太陽だけである。空からの光が、彼女の影を映し出した次の瞬間、それに変化が生じた。まったく同じ形の影が、恵の周りにいくつも現れ始めたのだ。そして、その影を作りだした恵自身も、何人、十数人、何十人と、数を増していく。

これが、増殖探偵「丸斗恵」の力、分身能力である。能力を駆使し、様々な依頼を解決する。これが、丸斗探偵局流の調査方法である。…依頼はあまり来ないが。今回は、恵自身の数をたくさん増やし、風潰しに孫の行方を捜すという作戦だ。

物陰に隠れた人影が数十にも増えた辺りで、恵たちは作戦を実行した。後から後から、まったく同じ女性が次々に現れる光景は、どこことなく異様だ。

そこから「彼女」は自分同士と出会わないように注意しながら、あちこちを探した。交差点近くのコンビニや店、裏道、書店…ちよつくら書店やコンビニで立ち読みをしつつも、各地を捜す恵。しかなかなか見つからない。疲れの色が見え始めた恵たちの脳裏に、

「誘拐」の二文字が浮かぶ。

その時、恵の一人から発見の合図が。貴婦人が見失った近くの道ではぐれ、路地裏で泣いていたようだ。

私たちの苦勞(?)は一体…と想いながらも発見に安心する恵たち。子供の近くにいる一人を残し、まるで煙のように消えていった。その様子を記憶するものは誰もいない。

探偵局。大好きなおばあちゃんと無事再会でき、大喜びの孫。肩の荷が降りた恵とデュークの前に、貴婦人はお礼を差し出した。なんと、それは封筒を厚くするほどの…

(げ、現金!? たくさんのマネー!? お金!?)  
目を輝かせる局長と…

(…局長、相変わらずがめつすぎます…)  
それに気付いた助手。

そして結果は、現金相当の商品券であった。いつもクレジットを使う貴婦人。ところが今日はお祭りという事もあり、手持ちがこれだけしかなかったようだ。

「ごめんなさい、局長さん。本当ならお金で支払う所なのですが…」  
「いいんですよ、無事見つかった事だし。お孫さんの笑顔が今回の依頼料代わりですよ!」

…と爽やかな事を言う局長であったが、勿論本心は惜しむ気持ちがあつたようだ。

(これなら後払いにしてもらうべきだったな…)

依頼人と孫が立ち去った後の探偵局。

「それにしてもこの封筒、どれくらいの商品券が入ってるんだろ…」  
「結構入ってる…って局長、早く貸して下さい! 金庫にしまいますよ」

「何するのよデューク! せっかく数えてあげようと思ったのに…」

「絶対無駄な事に使おうとしてましたよね今…」  
デュークの心配もごもつともである。恵にお金や金品が回ると、毎回無駄遣いに消えてしまうのだ。毎回報酬をもらつたたびにそんな事をされてはたまらない。

「そつちがその手なら…私も黙つてないわよ！」

宣戦布告をかけると同時に、何人にも増える局長。

「私によこしなさい、デューク！」

「そうはいかないですよ、局長！」

慣れた感じで軽やかにすり抜ける助手。

「……助手、助手なら待つのが常識でしょ！」「……」

「僕は待ちません！そしてそんな常識はありません！」

今日も賑やかに、丸斗探偵局の『二人』の時は過ぎる…

## 02・銭湯態勢、デューク・マルト

日本のある町にある探偵事務所「丸斗探偵局」。だが、規模が小さいためか依頼はあまり来ない。という事で、本日も暇なうな状態である。そんな中、局長の恵は、深刻な悩みを直面していた。

「家の風呂が壊れた…」

朝風呂をしていたら、お湯が出なくなってしまったのだ。

「風呂がないと体も洗えない、リラックスも出来ない…」

「局長、そこまで悩むのでしたら僕が…」

「ちよつと黙ってて！ ……修理するのも時間かかるし、風呂の予備があればなあ…そうか！」

「どうしましたか？」

彼女は「銭湯」という選択肢を忘れていたのに気付いた。探偵局を開いた当時からお世話になっている場所があるのだ。

「局長、「せんとう」って確か公衆浴場の事ですよ…？」

「そういえばデュークは初めてだったよね？それならなおさら行かないとダメみたい！」

どうせもう夕暮れだし、依頼も無さそうなので探偵局を早めに切り上げることにした恵。心配なデュークを連れ、いざ戦闘…いや、銭湯へ向かう事に。

「おばちゃん、恵です〜！お久しぶりー！」

「あら恵ちゃん。かっこいい男の人まで連れてきて、とうとう春がきたのかな？」



「ち、違つわよ！彼は私の助手であつて、その…もつ、おばちゃん  
の意地悪！」

「ふふふ…」

久しぶりに会う番頭のおばちゃんは、今日も元気そうだった。

…しかし、二人が着替え場へ向かう時に、おばちゃんがどこか不安  
そうな顔つきだったのをデュークは見逃さない。

一方の局長は、一目散に服を脱ぎ捨て、タオルを体に巻いて風呂へ  
直行。一日の疲れを癒す。とはいえ、今日は一日風呂の事を考えて  
いただけだったのだが。

「ふう、久しぶりに入るといい気分ね… さすが天然の源泉の真上  
に作つてるだけは…！」

…彼女は妙な視線を感じた。別の入浴客？ いや、それにしても変  
な方向から感じる。念のため大声を出すと、謎の視線はどこかへ消  
えた。

風呂からあがり、腰に手を当ててコーヒーマルクを飲む恵に、長い  
髪を結ったデュークが初めての経験の感想を嬉しそうに言った。

「銭湯つて気持ちいいですね！なんか僕や局長の肌が綺麗になつた  
気がします」

「あら、いつも綺麗じゃないっていうのかしらデュークくん？ …

ところで、さっきお風呂で変な感じしなかった？」

「え？」

デュークに先程の視線の事を問いかけるが、彼の入った湯「男湯で  
は特に何も感じなかったとのこと。ということは、考えられるのは  
一つ。誰かが外部から女風呂を覗いている！？」

「ただ、その事を直接おばちゃんに言うのは…」

「言わなきゃならないけど、いづらいわよね…」  
対処に悩む探偵と助手。

その時、番頭のおばちゃんが二人を呼んだ。相談したい事があるというのだ。

事情を聴く恵とデューク。

…やはり、先程の視線は「覗き」のようだ。最近、不審な動きをする男性を銭湯の周りでよく見かけるといふのだ。

「警察には相談したのですか？」

「ええ、一応相談はしてみたのよ…でも、確実な証拠がない限りは警察も動けないらしくて…」

「肝心な時に融通が利かないわね…これじゃあもつと覗かれないと解決させないって言ってるのと同じじゃない」

「局長、ちよつと落ち着いて下さい…。」

ところで、ちよつとお聞きしたい事があるのですが」

「どうしました？」

「この銭湯の場所に関してなのですが…」

「場所？」

この銭湯を見てデュークは考えていた事がある。いい具合に古びた銭湯の周りには新しいマンションや、新進企業の本社が目立つ。近くに一軒家もちらほら見かけるとはいえ、土地の買収の話もあるのではないか？

結果はまさにその通りであった。以前から土地の売買についての相談をよく持ちかけられるのだ。

「しつこそうね…じゃない、しつこそうですね…」

「ええ恵ちゃん…おっと失礼局長さん。私もここが大事だからいつもお断りしてるんですけど、何べんも来て…。お二人が来たつい

さつきもまた男の人が何人がやってきましてね…」

(もしかしたら…)

(もしかすると…)

二人の探偵の考えは一致した。「覗き」は企業連中による土地買収の脅しかもしれない。

という事で、悪を撃退するべく、デュークと共にこの話を引き受ける事に。

「ごほん、えー、ところで、今回の事件の解決に伴う報酬の話ですが…」

「うふふ、そういうと思って、これを用意しましたのよ、探偵さん。」

そう言って、おばちゃんがおもむろに出したのは…

「「銭湯の永久無料券!?!」」

そんなものを頂くとはもったいなさすぎると言おうとしたデュークを抑え、目を輝かせた恵は即答で依頼解決を約束した。

(局長…相変わらずですね…というか早く手を口から離してください…)

そして、夜の探偵事務所。今日は残業も兼ねて、この一件の作戦会議をすることにした。

「今回優先すべきは、まず覗き魔の撃退ですね」

「ただ、もし覗き魔が企業と関係していたら、たとえ追い払ってもしつこくくる可能性があるわね…」

「雇われ人ならなおさら。相手はどんな汚い手でも使う可能性があるりますし…」

「うーん…」

一瞬の沈黙を止めたのは恵だった。

「…ねえデューク、『あれ』、使える？」

「逆に伺いますが、今まで聞かなかった意味は？」

「心配だったのよ、デュークが乗り気にならないかな…って」

「その心配は無用ですよ、局長。今回は一大事、思う存分使いますよ」

「そうこなくちゃ！」

恵の言う「あれ」とは、一体何だろうか…？

…数日後。常連さんも上がり、静かになった銭湯。そこに一人の女性が来た。

そしてその女性を確認したかのごとく、数名の男が銭湯の周りに集まり出す… 綺麗な黒髪、フォーマルな服装… 仕事帰りの美人は彼らにはうってつけの「撮影材料」だ。

…それを、数名の「同じ姿」の女性たちが追跡していたのに、彼らは気付かない。

男たちは、彼らしか知らない秘密のポイントへ向かった。覗きの被害に遭っている銭湯側も手をこまねいている訳ではない。女湯と男湯を日によって入れ換える事で対処している… ただし敵には動きを読まれているのだが…。

ターゲットが浴室へ入って来た。余りにも浮世離れたそのスタイルに、下心丸出しの男たちは釘付けだ。体を洗い、髪を整え、浴槽へ向かう女性。

と、突然女性は右腕を高々と上げ、そして浴槽へ響かばかりの大きな音を指で鳴らした。その瞬間、覗き魔が見たのは信じられない光景であった。先程まで美しい紫髪の女性が入っていた場所には、

裸の若い長髪の男性が悠々と立っているではないか！

これは一体どういう事なのか？彼らとしては眼をそむけたくなる光景だが、あまりにも突然の出来事に唾然として身動きが出来ない。その時。

「何をしているの？」

彼らの後ろに、腕組をして怒り心頭の女性の姿が！自分たちの行為が見られていた事に気付き、慌てて逃げる覗き魔たち。しかし、女性は何故か追いかけない。追いかける必要なんてないからである…。

近くの道。追手をまいたと思っていた三人…だが。

「逃げるつもり？」

彼らの背後から聞こえた声に振り返ると、先程の女性が同じような格好をして立っているではないか！悲鳴一発、再び逃げ出す三人。追手を撒こうと三方向に逃げ出す三人。しかし、どの方向に逃げても先程の女性が待ち構えていた。

「どこに逃げても」

「貴方達に逃げ場所なんて」

「ないのよ！」

彼らは気付いた。自分たちを追いかけているのは一人ではない事に。そして、彼らは十字路に追い詰められた。周りには、腕組みをした大勢の女性…丸斗探偵局局長、丸斗恵が。

「……………なんでもっと早くに気付かなかったのかしら？」



気持ちよさが忘れられない。

「今日は私が銭湯担当だからね、あなたは家でゆっくり浸かってなさい」「何言ってるのよ、私が担当じゃなかったの?」「私よ!」

「いや私!」

「局長、自分同士で喧嘩しないでくださいよ…」

…しばらくは、丸斗恵が同時に2人以上存在する時間が長くなりそう  
うだ。

ドタバタが落ち着き、新聞を見る恵。表紙をめくり、中のページを読む途中、とある記事を見つけた。

銭湯で覗き魔が逮捕されたというのだ。しかも、「全国区の記事」の欄に。記事には、企業に頼まれた覗き屋が、銭湯の価値を下げようとしていたとあった。会社も釈明に追われ、土地買収どころではなさそうだ。

サムズアップでデュークの仕事を褒める恵。笑顔で返すデューク。過去や現在を自由に改変し、様々な事象を思いのままに操作する、「時空改変」と呼ばれる能力。これが、未来からやって来た助手デューク・マルトの得意技であり、担当する業務である。

### 03・血で血を増やす

基本的にこの小説は「今日も暇な丸斗探偵局」で始まりそうなほど、依頼はあまり来ないここ丸斗探偵局。そして暇そうな丸斗恵。しかし、今日に限ってはそう無かった。丸斗探偵局局长、丸斗恵が今いるのはどこかの廃ビル。口をガムテープで覆われ、体は縛られている。

(完全に油断してた…)

現在、彼女はとある暴力団に捕まっている。何故このようになったのか、説明しよう。

数日前、息子の帰りが遅い事を心配した母親からの依頼があった。それを受け、調査を続けていた恵たちは、次第にある可能性に行きついた。もしかしたら暴走族の一員になったのではないか…というものである。結果は全く関係のないものだったが、本題はここからである。

「やっぱり予想通りだったわね…」

「そのようですね…」

未だに消える事のない暴走族。どうやらその暴走族を金づるにしている暴力団がいるらしい。それに関して助手のデュークが調べたところ、本拠地が近くにある事が分かった。どうやらある大物の暴力団の下っ端が勝手に独立して作ったようで、まだ若い連中が多く、非常に乱暴な一団という内容まで判明。警察もじきに動くであろうという情報も耳に届いている。



「最近、ひったくりや盗難が多いのもこれがあるかもしれません」  
「犯人も捕まってるない、顔も分からない。もしかしたら…ね」

と、そんな時に恵はとんでもない事を言い出した。やはりここまでわかった以上、手柄は頂きたいものである。普通、このような事例ではデュークは猛反発を行う。自分たちはあくまで探偵、犯人を逮捕するのは警察の仕事。時空改変という力を持つものの、その力を知り尽くしているが故に、それを無駄に多用する事を避けている。ところが…。

「分かりました」

今回はデュークも大いに賛成した。何か理由はあるようだが、恵はそれについて聞く事は無かった。

早速時空改変の能力が発揮される。過去の世界を作り出す様々な法則や法律、書類、そしてそれに基づく人々の考え。それらの書き換えを行い、「行方不明者調査」の名目で暴力団本拠地近くまで行ける事になった。

そして当日の夜。…なぜ夜かというと、悪人をおびき寄せやすいからと、恵が寝坊したからである。

暴力団本拠地近くまで恵が一人で来た時、突然背後から男に襲われ、口に押しつけられたガーゼの催眠物質を吸ってしまった。そして今、彼女は捕まっている。

恵が探偵である事はとくにばれており、口封じも兼ねて裏商売のAV業者に売り渡そう、と暴力団の連中がその近く談笑していた。分身しようにも、このままだと紐に詰まってるくに体を動かせない。苦悶の表情を浮かべる女探偵。こんな事なら、自分だけではなくデュークも連れてくれば良かった。そう恵は思った…と書きそうだが

彼女はそうは考えていなかった。

突然廃ビルが慌ただしくなった。何者かが乱入してきたのだ。襲いかかる男を軽く退け、恵が閉じ込められていた部屋を見つけたのは…

「悪いけど、人質返してもらおうかしら？」

「丸斗恵」であった。

いざという時のため、もう一人自分を作っていたのだ。これが、彼女第一の奥の手である。

分身したとはいえ、全力疾走の男性をも追い抜く力を持つ恵にとっては、二人で息を合わせれば、硬い紐を引きちぎる事も不可能ではない。自分に礼を言い、ようやく自由が戻った。しかし、当然事態はそれでは終わらない。

「このまま逃げる気か？」

暴力団連中は押しかけて来たもう一人の恵を、双子の姉妹と解釈したようだ。言葉汚く罵る彼らだが、気の強い恵にはそうはいかない。全員まとめて始末してやると意気込む二人の局長。

そして、戦いは彼女の強烈な蹴りから始まった。顎に打ち込まれた衝撃で吹っ飛ぶ男。小娘を捕らえようとする彼らだが、動きやすいジーンズを身につけている二人の恵相手には少々不利な状況であった。女性という事で油断したからか、予想外の押されぎみの男たちの中で、焦った一人が行動を起こした。

「く、くっそおおお！」

次の瞬間、辺りに聞きなれない音が響いた。この国では、滅多に聞

く事が出来ない火薬の音、衝撃の跡。

紐から解かれたばかりの恵が、血まみれになって倒れていた。自分の横で倒れこむもう一人の自分を、もう一人の恵は静かに見つめていた。何を考えているか、動揺しながらも動き出した暴力団員は知らない。当然であろう、まさか次の瞬間あのような光景が起きてしまうのだから。

倒れていたはずの「死体」が、突然光になって消え、そして部屋中に飛んだ血しぶきが人型に膨らみ、次々に「丸斗恵」の姿に変わっているのだ！

「私が相手よ」「私も相手よ」「私もよ」「私も」「私も」「私も」  
「私も」「私も」「私も」「私も」「私も」……

恐怖におののく暴力団員の一方、恵の数は次々に増え続けた。銃で撃ち抜いても、その分また増え、逆にこの建物を埋め尽くしていく。そしてついに、暴力団員たちは失神してしまった……。

後はこれを警察に送りこめば大丈夫……と思った恵。分身をいったん消す事にした。……だが。

「あ……あれ」「消えない!?!」「ちよつと、どうなってるのよ!?!」  
「私も知らない!」「私も!」

消えない。それどころか血しぶきからの分身が文字通り「分裂」を始めてしまった。ちよつとガン細胞が無限に分裂し続けるのと同じように、本人でも止められなくなってしまっているのだ。

「ちよつと、もう入れないわよ……!」「」「そんな事言っても……」「」  
「」「ちよ、もうやめて!」「」「」

しかし、恵の分裂は止まらない。もう部屋という部屋がぎゅう詰めである。このままだと、外に溢れて大変な事になってしまう。こうなつては、もう局長に残された道は一つ。

助けて…！

そして、窓ガラスすら割れかけるほどの缶詰め状態になった時、救世主は現れた。

「局長！大丈夫ですか！」

助手のデューク・マルトだ。手に持ってきたのは簡易型の医療用レーザー。すし詰め恵たちに当てると、次々に光となって消えた。たった数分で、ビルを埋め尽くしていた恵は元通り一人に戻った。

「危ない所でしたね、局長」

「そんなものまで用意して…準備は良いけど実行は遅かったわね、デューク」

「すみません、今後は気をつけます」

次の日。新聞には例の暴力団員が全員逮捕されたというニュースが。しかし、あくまで「警察」が全てを行ったかのように書いてある。局長の能力は見世物なんかじゃない。だから、歴史には残らせない。デュークの得意分野「時空改変」は、主にこのために使われるのだ。なぜあの時賛成したのかデュークに尋ねる恵。口を濁す「最高のアシスタント」の両頬に、お礼のキスをする二人の恵。顔を沸騰させつつ、デュークは最後に改変の仕上げを行った。過去の自分が「憧れの探偵」のピンチを救えるよう、過去に起きた事件に「情報提供者」として「丸斗恵」の名前を加える、という…。

(言えないよな…さすがにあんな事は)

#### 04・そして彼らは出会った

話は少し昔に遡る。

路地裏でチンピラ3人が何かを囲み、殴ったり蹴ったりしている。何か言ったらどうなんだ、そういう彼らに対し、その対象は何も言えない状態となっていた。それは、一人の青年。執事と見間違う燕尾服も、彼らの乱暴のせいでボロボロとなり、長い髪も引きちぎられていた。

しかし、いくらあれだけ殴られ蹴られたのに、彼は笑みを浮かべていた。それに腹を立てたチンピラが、近くにあつた角材をぶつけようとする…。

「あんたたち、何してるの？」

手を止めたチンピラたちが見たのは、腕組みをした一人のスタイルの良い女性だった。

そして、彼女の姿を見て安心したのか、リンチされていた青年は意識を失った…

|||||

現在。

本日依頼の予約が来ている丸斗探偵局。しかし最近掃除をしていなかったので少々埃だらけである。真面目にはたきを用意する助手のデューク。一方局長の丸斗恵は、非常に面倒臭く感じていた。

「局長も手伝ってくださいよ…」

「えー…私も…？よし、じゃあ…この手で行こうか」「」

さっそく分身を作り、掃除を任せようとする彼女。しかし、根本が

嫌がっている以上、分身も掃除を嫌がるというのは当然の流れ。そしてその分身がまた分身を作る。その分身もまたまた分身を作り…。

「ちょっと入れないわよ…」「うぎゅう…そこ邪魔…」

広めの部屋のはずの丸斗探偵局が同一人物でぎゅう詰めになってしまった。これにはさすがのデュークも…

「いい加減にしてください!!」

「デュークのケチ…」「ケチで結構です」

助手に叱られたのを不服に思いつつ、分身同士で協力して掃除をする恵。

とはいえさすがは局長得意の人海戦術、あっという間に綺麗になった探偵局。

と、ちょうどいい所に依頼人がやってきた。瞬時に一人に戻った局長が出迎える。今回の依頼人は女性。そして、その依頼の内容は女性は勿論、男性にも非常に堪えるもの。

「ストーリーカーですか…」

「はい…」

まるで自分を追うように電話がかかったり、視線を感じたり、そのような事がずっと続いているらしい。人権を無視するストーリーカーに憤りを感じる恵の横で、なぜかデュークは依頼人の顔をまじまじと見つめていた。どうしたのかと聞く恵に、依頼人が「彼の知り合いによく似た顔をしていたためだと応える助手。惚れたのかとからかいつつも、しっかりと依頼人には謝る彼女であった。

「どうしますか、局長？」

「デュークの力では…」

「不安なところもありますね…」

依頼人が去った後、作戦会議が始まった。様々な事情があり、盗聴調査に関してはデュークの力を持ってしても丸斗探偵局の領域ではないため、探偵仲間の「調査のプロ」に連絡を入れ、改めて調査することになった。

そんな中、デュークは考えた。あの女性に良く似た顔を、確かに見たことがある。自分もよく知るものだ。しかし、それが何なのかまでは、この時点では思い出せなかったようだ。

それから数日後、探偵仲間と共に依頼人の自宅にお邪魔して調査した。盗聴調査のプロだけあって手際の良い調査が行われたものの、盗聴器は発見されなかった。しかし、今までの経緯を考えると犯人は何らかの形で彼女の動きを把握している事は確かである。そうすると、犯人は外から覗いたりしてるのだろうか。

悩む局長を、依頼人が呼びとめた。探偵局に相談へ言った後から、妙な事を経験したというのだ。例のストーカーは、彼女の行動を先読みしたような電話をしてくる事があるのだ。しかも、十中八九合っていると言うのだ。

それを聞いて、デュークは確信した。今回の犯人と、この女性との関係を。もしかしたら被害を抑えるどころか、犯人を退治できるかもしれない。調査を終えた後、探偵局へ戻ってその旨を局長である恵に報告した彼。暇になってしまった探偵仲間にも後で結果を報告することにし、改めて作戦を練り直す事にした。

再び数日後、住宅地。一人の女性：依頼人の女性が細い路地を歩いている。薄暗い街灯が、もう少しでたどり着く家までの道案内をしていた。夜の寂しさを醸し出す光景が続く。



と、その時。まさに不意打ちの如く背後に突然男が現れ、彼女に刃物を振りかざしてきた。素早くよける依頼人だが、鋭く光るナイフが右肩をかすめた瞬間、目の前から突然男の姿が消え、背後に現れた。そしてそのまま脳天を狙ってナイフを振りおろそうとする男を、依頼人は必死に食い止める。夜の道で続く揉み合い、それを終結させたのは…

「予想通りだったね」

丸斗探偵局助手、デューク・マルトの一声だった。

一瞬慌てる男だが、その顔を見るや否やすぐ体制を立て直し、女性を掴み首に刃物をあてた。彼女を人質にでもして見逃すつもりのもうだ。

一方のデュークも男と同様、相手側の顔を知っていた。

この男、デューク・マルトと同じ未来人。ギャングまがいの行為を行い、逮捕されたのだ。しかし、とある事情で脱獄に成功、同じく牢獄されていた仲間を見捨てて過去へ逃げのびた。今襲っている「依頼人」は、彼が逮捕されるきっかけを作った捜査官の遠い先祖。彼は自らの過去を思いのままに変えようとしているのだ。相変わらず卑怯な真似ばかり、と憎き犯罪者を蔑むデューク。しかし、男にも言い返す材料があった。

「どのツラ下げて俺を卑怯だとか言うんだあ、

大犯罪者さんよお？」

犯罪者、デューク・マルト。

タイムスリップの技術が発達した未来において、歴史を変えること、いわゆる時空改変は「8つ目の大罪」と呼ばれるほどの重罪になっ

ている。かつてのデュークも、「犯罪組織」の一員として何度も大かつ大規模な時空改変を起こし、時空警察に指名手配されているのだ。

ただ、彼のために言うと、今のデュークは決して犯罪者ではない。過去の世界で起きたある出来事がきっかけで、彼は真実を知り、犯罪から身を洗う事を決意。自らの償いの意味で過去へ跳んだ。その後の功績を知っている者も時空警察には多いようで、彼の扱いは現在「義賊」的なものとされている。

しかし、デュークの起こした犯罪歴は決して消える事は無い。生物種の絶滅、文明の崩壊、地殻変動…かつて起こした様々な犯罪を述べ、反応しないデュークを男はおもしろげに罵り続けた。

しかし、このとき男は完全に油断していた。

突然指を噛まれ、依頼人をつかむ腕の力が抜ける。

「なっ!?!」

その隙に逃げる依頼人。未来から来たこの男が得意とする「瞬間移動」で追いつこうとした…が、現れた途端、脳天に強烈なキックを食らわせられ、体制が崩れる。振り返った男が見たのは、もう一人の依頼人だった。

啞然とする彼。気づくと、デュークの姿は消え、代わりに道を覆い尽くす依頼人の大群に囲まれていた。いくら未来の技術が発達しても、瞬時に同一の人物が現れると言う事は決してあり得ない、それが彼の常識であった。だが、時として常識が役に立たない事がある。そういう状態に慣れておらず、恐怖で震える男の手から刃物が落ちた瞬間、無数の依頼人が、男のある「一点」へ集中攻撃を食らわせた。

…遠い未来でも、男の弱点は変わらないようだ。

気絶した殺人未遂犯を見下げている依頼人の一人がデュークの名前を呼ぶと、近くの家の屋根上が歪み、一人の男が姿を現した。そしてデュークが指を鳴らすと、道を埋め尽くす依頼人の姿が、増殖探偵・丸斗恵へと変わった。男の「瞬間移動」と同様、デュークにも能力：「時空改変」という凄まじい能力がある。森羅万象、ほぼあらゆるものを操り、作りだし、消し去る事が出来る。まさに「八番目の大罪」にふさわしい能力だ。今回はこれを使い、恵の姿を依頼人の姿に変え、自らも透明になれる能力を一定時間身に付けたのである。そして犯人をおびき寄せ、一気に退治する。今回の作戦、依頼と共に見事に成功、そして解決した。

翌日。依頼人に事件解決の知らせを届けた恵とデューク。依頼人の安心した笑みを見るのが、探偵業をやつて一番幸せな時だ。料金は後で口座に振り込んでもらうことになり、未来史に名を残す凄腕捜査官の遠い先祖は去って行った。

それから少し経ち、落ち着いてきた頃にデュークが局長に尋ねた。あの犯人の男が言ったことである。あの後、犯人はこれまたデュークの時空改変で「下着泥棒」に仕立て上げられた。今頃警察のお世話になっているころだろう。その男が言った。

「僕は大犯罪者、過去へ逃げた臆病者、そして卑怯者……」

心配顔を隠せぬまま彼は恵に改めて問う。こんな自分でも、助手として雇ってくれるのか、と。

それに対する局長の答えは、いつものような明るい声だった。

「いまさら何を心配してるの？」

大事な右腕、大事な助手、それがデューク・マルト。例えどんな苦しい過去を持っていようと、今の彼を信頼しない局長なんて、この世界にいるわけがない、と恵は力強く言った。

その言葉に、とびきりの笑顔で返すデューク。その眼に浮かぶものを、局長に見せるのは、彼としても許せない事。彼女に背を向け、そっと目に滲む水を時空改変で消した。

少し昔。

あの路地裏で出会った二人は、互いの秘密を共有した。

恵の分身の術、デュークの過去。

デュークの方は見てしまった恵の秘密を、恵は自ら語ったデュークの消せない過去を、絶対に漏らさないと約束して。

ここで意気投合した二人。のちに探偵事務所を作ることになるだが、それはまた別の話。

## 05・隣人調査と嫁入り娘：前編

丸斗探偵局に、依頼が入った。

最近各地で二セ札が多いという事もあり、局長の丸斗恵は助手であるデューク・マルトにしっかりと確認するように頼んだ。勿論、有能な助手にわざわざ言う必要はないというのは承知の上だが。

「それにしてもがめついですね局長……」

「だって最近ずっとコンビニの安いおにぎりで済ませてるから……そろそろお金が……」

「まったく、この前荒っぽく使ったからですよ……」

やって来たのは近所のアパートに住む管理人のおじさんだった。恵たちも時々スーパーなどで会う顔見知りの関係だ。

彼の持ち込んだ依頼は、「隣人調査」、近隣の人の身元や情報などをあたるものであった。

「実は……この住人についてなんです……」

「2階の3号室の……」

「男性の方ですね」

その男性の様子が、どうやら最近様子がおかしいらしい。カーテンはあまり開かなく、出入りも見られない。それなのに、何故かゴミの量が多いようなのだ。

「ゴミの量は、あくまでわしが見た判断にすぎんですが……」

しかし、余りにも不気味な事態に住人から不安の声も出始めていた。このままだとアパートの「格」にも影響を及ぼすかもしれない、と

言う事で二人に調査を依頼したとといういきさつである。

久しぶりの依頼と、予想以上の解決金で気分が舞いあがる局長をなだめながら、デュークはある程度予想していた。その男性の方と繋がりがある可能性は高いという事を…。

…その日の夜から早速作戦が始まった。局長自身の体を使っての張り込み調査だ。

ちょうど以前に起きた風呂騒動と同じように、数人の「丸斗恵」によるローテーションである。

彼女は「一人」にも「複数人」にもなれる。特殊能力の持ち主なのだ。

しばらく何も動きを見せず、次第に彼女にも飽きの色が見え始めた、そんな時であった。数日後の夜に、動きがあったのは。

今回も数人の「自分自身」で辺りを見回る彼女。

「今日は確か燃えないゴミの日だから…」、「弁当殻を捨てに行く率が高いわね…」

ただのゴミ捨ても、探偵にとっては大きな手がかりに変わる。腐っても探偵である彼女の本能が、感覚を研ぎ澄まさせていた。そんな中、携帯電話が鳴った。どちらの「恵」に鳴ったのかは定かではないが、その着信音を聞いて相手も「自分自身」である事は確信した。と言う事は…

「もしもし、こちらゴミステーション近くの恵！」

「はいこちら本部の恵。どうしたの？」

……へ！？なにそれ！？」「な、何かあったの？」

…三人目の「恵」が見たものは、まさに不可解なものであった。突

然、本当に突然男が現れ、たくさんのゴミを捨て、そして煙のように消え去ったのだという…。

その次の日。

「調べたのですが…以前のような未来の犯罪者があそこにいる、という資料はありませんね」

「そんな！どの機密文書にも？」

「ええ、最大で数千年後までの警察や防衛隊のコンピュータを可能な限りハックしてみたのですが…」

「ええ〜どうということ…？」

何やら物騒な会話をしている恵とデューク。デューク得意の時空改変で気付かれないまま未来のコンピュータに侵入して資料を探っていたようだ…

以前同じような手段で犯行に及ぼうとした悪質な未来人がいたという前例があったのだが、今回はどうもそれとは違うようだ。

「これはもう一度調べ直す必要が…ん？」

「誰か来たようですね」

インターホン越しに彼女が見たのは、どこか気品のある長髪の若い女性であった。基本的に予約を入れていない場合は断る場合が多いのだが、彼女の顔を見て、恵は用件を聞くことにした。その眼から、誰からも救いを得る事が出来ないようなオーラを感じたからである。

「どうぞ、お入りください」

「かたじけなく存じます」

どうやら彼女も身元調査に来たらしい。それも二人も調べてほしい

という。

「なるほど、結婚する事になって、ある方と一緒にいる予定だと」  
大雑把に言つと、そういう事である。女性にとって結婚は重要な問題、恵が黙っているはずはなかった。

「しかし、密かに恋焦がれている方がおられるということですね」  
「はい…左様でございます…」

物腰も良く、気品がある彼女を見ると、デュークはずばらでいい加減な局長と心の中で比べざるを得なかった。

富豪である彼女の両親としてはどちらか一方を選んで欲しいようだが、ある程度自由な気風らしく、最終選択権に彼女にあるらしい。その参考にするべく、探偵局に依頼を行ったのだ。そして、彼女の持ってきた写真を見て二人の探偵は驚いた。ホスト風の一方はともかく、もう一方は以前より何度も見ている顔であった。あのマンションに住んでいる、挙動不審の彼だったのだ。

恵たちの選択は勿論承諾。女性問題と言う事で恵はがぜんやる気になっていた。

…そんな依頼人が去った後、テーブルの上には二枚の写真ではなく、二枚の葉っぱが載っていたことに気付いたのはそれからしばらく経つてのことである。

同時進行で二つの調査を行う探偵局。こういう時こそ、増殖探偵の見せどころである。

美人の依頼人の許嫁である「ホスト」班、挙動不審の「彼」班、（デュークがいる）探偵局班に分かれ、数人単位で調査をする事にな



った。

ホスト風の青年の方は、デュークが能力を使うまでもなくネットで結果が出た。たくさん株を持ち、それで生計をたてているカリスマ資産家らしい。ただ、詳しいプロフィールは裏サイトなどにも載っておらず、直接彼の家付近で張り込みを行う事に。

デュークから情報操作を用いるという考えも出されたが、局長に断られた。実地で張り込みしたいという行動派の心境である。

一方の「彼」班。張り込みを続けるうちに色々分かって来た事があった。

最近どうも探偵局近くで野良犬の声がうるさい…と思われていたがどうも彼の家から流れてくるらしい。一応ペットOKのアパートなのだが、それにしても野性味がありすぎるし、よく聞くと犬とは違う。

そしてもうひとつ。

恵「…あ…油揚げ…?」「」

探偵の技の一つにゴミ漁りがある。ゴミの中に様々な資料が入っている場合があるのだ。

なので皆さま、住所などが書いてある手紙などは手でちぎって捨てるようにしましょう。

…しかし丸斗探偵局はそんな用心も通用しない。お馴染みデュークの能力で、中身をあっという間に解析してしまうのだ。ただ今回は妙だった。燃えないゴミの中身の1/3が、近くのスーパーの油揚げ関連なのだ。

「油揚げ…大好きなんですかね…ってどうしたんですか、局長…」

「ねえ、デュークって妖怪とかの類とか、信じる？」

「あいにく僕は、裏付けされた存在意義が無いもの以外は信じない思考です。探偵として、当然ですよ。いきなりどうしたんですか？」  
「ううん、何でもない」

…このとき、自分の推理に半信半疑だった恵。しかし、数日後、それは確信へと変わる。

「彼」がゴミ捨て以外の目的でアパートを出たのだ。

そのまま駆け出し、山の方へと向かう彼。後を追う恵だが、「彼の動きが結構速い。そこで恵が指を鳴らすと、山へ向かう道の角のいたるところに、恵と寸分違わない女性が現れた。これが丸斗探偵局流追跡方法だ。

無論、前もってデュークに連絡し、ターゲットにはれないように「細工」を施してもらった。位相のずれた彼女たちの動きを、この街の人たちは誰も知らない。

それぞれ情報を共有し合い、合体して数を減らしながら「彼」のたどる道を把握していく恵。追跡の中、ターゲットは山の中に入ったことが判明した。

速報を受け、瞬間移動でやって来た助手のデュークを伴い、こっそり後をつける恵。

そして二人は見た。木々の生い茂る山の中で、一人の「人間」が、一匹の「キツネ」に変身するのを…。

## 06・隣人調査と嫁入り娘：後編

「彼」の追跡側が動きを見せていた頃、ホスト班も慌ただしくなっていた。ターゲットの男が家から出てきた。どうやら食べ物を買いにコンビニへ向かうようだ。

高めの弁当を買う彼：最近ずっと安物ばかりだったので羨ましがる尾行中の恵数名。すると、男の携帯電話に着信が入ったようだ。内容は至って普通の言葉だが、恵の地獄耳はしつかりと彼の言葉を嗅ぎつけ、脳内の辞書をフル活用させた。単語の繋がりを知識の中にある法則にあてはめると、完全にとある裏稼業の隠語である。

次の日の探偵局は、久しぶりに探偵らしい盛り上がりを見せていた。：と言つても、恵が数十人いるだけで違う顔はデュークだけという、遺伝子的に見ると寂すぎる組み合わせなのだが。

「彼」班は昨日の衝撃的な事実を。

「ホスト」班は男の不可解な電話を。

そして「本部」班。こちらにも不思議な事を知った。依頼人の男性と調査先の男。双方とも共通点があった。ある一定の時期から、公式の記録が一切残っていないのだ。デュークの力で過去の情報を洗いざらい調べてみたが、それでも駄目であった。

ふと恵たちの頭にある思いが浮かんた。過去の事が無い、過去の事を忘れている。まるで自分のようだ、と。それから始まった話し合いですぐに忘れ去られていった。それに、自分は過去の事を振り返らない性分、そんな事気にしないのだ。

そんな話し合いの中、資料として以前の写真が必要になったのだが、信じられない事が起きた。どこを探しても、写真が見当たらないのだ。念のために過去を観察し、その様子を見たデュークが、あまり見せない「驚愕」の表情を見せた。

「どうしたの、デューク!？」

「じゃ…写真が…葉っぱに変わってる…」

そして、ようやく「二人」は引き出しの中でおれている二枚の葉っぱに気付いた。恵は確信した。双方の事件に関する重大な情報。丸斗探偵局は、「化け狐」たちが巻き起こす騒動に巻き込まれたのだ。

「妖怪が本当にいるなんて…」

ひとり言のように呟く助手に、局長は尋ねた。

「未来じゃ妖怪なんて存在しないの?」

彼の様子からも分かるように、彼の来た未来では科学が感情論をも上回るほどに発達しており、妖怪ですらその存在を「肯定」したうえで「完全否定」されている。一言でまとめると、妖怪は「絶滅した」世界だと言う。

「確かに貴方の世界ではそうかもしれない。でもね、デューク。この世には科学がどれだけ進んでも絶対分らないことだってある。これだけは覚えておいて」

「…分かりました、局長。今回の一件、局長主導でお願いできますか?」

「前からそうだった気がするけどね」

…かくして、夜遅くまで「二人」は作戦を練った。今回の一件、強引(デューク曰く)だが鮮やかに(恵曰く)解決できそうな方法がある。

数日後の夜の繁華街。

ホスト風の男が、数人の男を連れて町を練り歩いている。資産家である彼の正体、お察しの通り化け狐である。ある方法で無尽蔵の金を持つ彼、夜遊びもお手の物である。

今日もまた数日前に出会った一人のグラマラスな「美女」と待ち合わせである。

「ごめんごめん、遅くなっちゃって…」

「いいさ、君を待つ時間もまた乙なものだからね」

「もう…」

顔はてれているが、内心はこの男を貶しているのは言うまでもない。

そして、彼女を連れて歩き出す男。その足は、ある路地裏へと向かっていた。こんなところに来てどうしたのか。その問いに、しばしの間をおいて、男は答えた。

「……………こうするのさ！」

腹に突然衝撃を受ける女性。あつという間に気絶してしまった。…しかし、それこそ彼女…丸斗恵の狙いどころであった。

|| || || || || || || ||

それから時間が経った、暗がりの中。服のまま縛り付けられている恵が、意識を取り戻した。それに気付いた男たちが、彼女を取り囲む。ホスト風の男以外にも、いかにも典型的な「不良」と思われるような格好の連中ばかりだ。しかし、恵はある程度彼らの正体について察知をしていた。

「なんのつもりかしら、化け狐のみなさん？」

「ほう、あんた俺たちの秘密知ってるんだね？」

あっさりと言葉たちが自分たちの正体を明かしてしまった事に、一瞬拍子抜けする恵。しかし、彼女とてそう簡単に自分の心の内を相手に知らせる事はしない。

「ええ、あなたたちが変身するところ、見せてもらってたの」  
勿論、嘘である。

「ちつ、人間ごとに見られちゃうとは俺もまだまだだな」

「ごとき」。その言葉に、恵は引っかけた。

「ああそうさ、お前らのような、化けられもしない、ころつと騙される愚かな生物にはこんな姿の方がお似合いさ！」

ネットで彼を支持する声が大きいの、彼が有りもしない嘘の予定や情報を載せただけ。少し考えれば無理だと分かるのに、誰もそれに気づかず、自分をいい人、尊敬する人だと崇める。

「あんな簡単に俺支持へ持って行けるなんてなあハハハ！」

「ネットはまあ…世論いじるの楽し…。それで、私をどうする気？」

こういう時の場合は、基本的にやる事は一つ。勿論、今回もそれであつた。

「人身売買」。

「だろうね…この流れだと」

「余裕ぶっこいていいのかな？どうせこれからお前は眠りに就く

ことになるのさ、この薬品でな！」

「そんなものに頼ろうとするなんて、あなたの方がよっぽど愚かじやない？」

「…こいつ、余裕ぶっこきやがって…！」

男が手を上げようとした、その時。

「はいはいそこまでー！」

ホスト狐とその仲間、そして恵が振り向いた先には、依頼人の女性。「彼」、そしてもう一人の恵がいた。一体何が起こったのか、一瞬男には理解できなかった。当然読者の方も理解できない可能性があるるので、説明しておこう。

実は、今回恵の一人を囷にする作戦と並行して、探偵局は「彼」および依頼人の女性と接触。

デュークは女性と。

「…やっぱりばれてましたか…」

「いえ、僕たちも危うく気付かないところでした」

恵は依頼人と。

「びつくりしましたよ」

「俺たちの詰めが甘かったようですね…」

あの鳴き声は「彼」が狐に戻った時の鳴き声であった。人間に化けて暮らす中、ストレスが貯まると元の姿に戻り、遠吠えをするようだ。

油揚げはもちろん狐だから…というわけではなく、単に彼が大好きだったかららしい。

そして、もうひとつ重要な事が分かった…

「こ…これは…」

「おやおや、これは。そんなどんくさい田舎狐を連れてどうしました？」

このホスト風の狐こそ、彼女の許嫁として結婚をする約束を交わらせていたものであった。しかし、当然もう彼女には結婚する意志も欲も消えている。

「い…田舎…そりゃ俺は田舎だけど…」

「しっ、静かに…」

そして、依頼人も静かに怒っていた。自分では無い、故郷を貶された事に。しかし、それは隣にいる恵によって代弁された。

「どうしたもこうしたもないわよ！私たちは、あなたの化けの皮を剥がしに来たのよ」

「化けの皮？」

「この人はね、あんたと違って本物のお金で暮らそうとしてるのよ！ニセ札で稼ぐような卑怯者とは違う！」

その一言に、女性は驚いた。隣にいる、「田舎狐」の行っていた事に。

「本当にごめん、あなたに内緒で尾行をさせてもらったの。見たわ、求人情報を持って工場へ行くあなたを。」

「そ、そうですか…」

「けっ、そんなちんけな安っぽい所で働いて何になる！さあ、どう





！！

狐の前に現れたのは、一人の若い「人間」の男だった。

「あなた、先程人間は愚かな生物、といたしましたね？

人間をなめると、痛い目に遭いますよ……」

妖怪の弱点は、自らの存在を崩される事。

未来の科学は、超的存在を抹殺し、神をも凌駕する。

それから数日後。

「で、ニセ札は全部彼の仕業だったという事ね」

恵が持つ新聞のトップ欄に、ホスト風の男の写真が大きく載っていた。偽札製造の容疑で逮捕されたのだ。デュークの怒りの時空改変によって、彼は過去を変えられ、一生人間のまま罪を償うことになっている。妖怪としてではなく、彼がずっと貶し続けてきた汚らしい姿として。

「ええ。先程過去へ跳んで確認したのですが、あの狐が今まで使用してきたお金、すべてが葉っぱを変化させたものでした。無論、局長が欲しがっていたあの高級弁当も葉っぱの金で買っていたようですね」

「これに気付いてたら、もっと早く私の行動力で解決できたのにな

……あちゃー……」

「まあ、いいじゃないですか。それに、局長もたまには僕に頼ってもいいんですよ」

「局長たる私が部下に頼ってばかりだと墮落するじゃない？だからさ？」

「……さすが局長ですね。」

その時、ドアが開いて恵と同じ顔の女性が入って来た。局長の分身……いや、こちらがオリジナルかもしれない。彼女には分身もオリジナルも関係ない、どちらとも「丸斗恵」なのである。

「で、どう?」

「ばつちり、ほれ! ちゃんとして依頼料が入ってるわよ!」

そう、あの夫婦と管理人からの依頼料金である。

その後、恵たちは管理人に納得できるような形で説明を行った。デュークもこつそり「協力」していたようだが。また、あの部屋にこれから夫婦で住む事になるだろう、ということも付け加えた。勿論本人たちも交えた話し合いの中で。

「うーん…夫婦の依頼料、分割払いローンも可って言ったけどこの金額は少な…ゲフンゲゲン」

「局長…大事なのは金額じゃないですよ」

「そうね、あの人、ちゃんと働いて本物のお金で過ごさそうとしている。」「案外うまく人間社会でやっていけそうね」

「そうですね。今回の依頼、無事解決ということ?」

「「OK!」」

その日は、午後から雨が降って来た。空は晴れているのにも関わらず。

これを、「狐の嫁入り」という。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0202z/>

---

増殖探偵・丸斗恵

2011年12月9日01時55分発行